

クニマスの保全及び養殖技術に関する研究（クニマス資源の動向）

とりまとめ:小澤 諒

2010年に西湖で再発見されたクニマスの保護と活用を図るため、現在までクニマスの保全及び養殖技術に関する研究に取り組んでいる。ここではクニマス保全の基礎知見となる資源量を推定し、その動向を評価したので報告する。

結果の概要

2023年秋の推定資源尾数は6,092尾（1歳以上、寿命6歳とした場合）となり、昨年から微増し、2012年の推定開始以降5番目に高い（平均値に近い）値となった（図1）。2020年から資源量が増加傾向にあった理由については、クニマス1歳魚の生残が良かったことが考えられたが、その要因として2018年、2019年の富士河口湖町の年間降水量が多かったため、産卵場付近の湧水量が増加するなど産卵環境が良好だったことなどが推察された。一方で、2020年以降は年間降水量が平年並みに戻ったことなどが影響したことで、2022年からの資源量は平均値に近い値に転じたものと推察された。

2024年のクニマスの1人1時間当たりの平均釣果は2021年に続き2番目に高い値だが、ヒメマスの平均釣果が低下し、見かけ上クニマスの比率が上昇しているだけの可能性もあり、クニマス資源量が増加していると一概に言うことはできない。クニマスは近縁種のヒメマス同様資源変動が激しいことが予想され、引き続き注視が必要である。

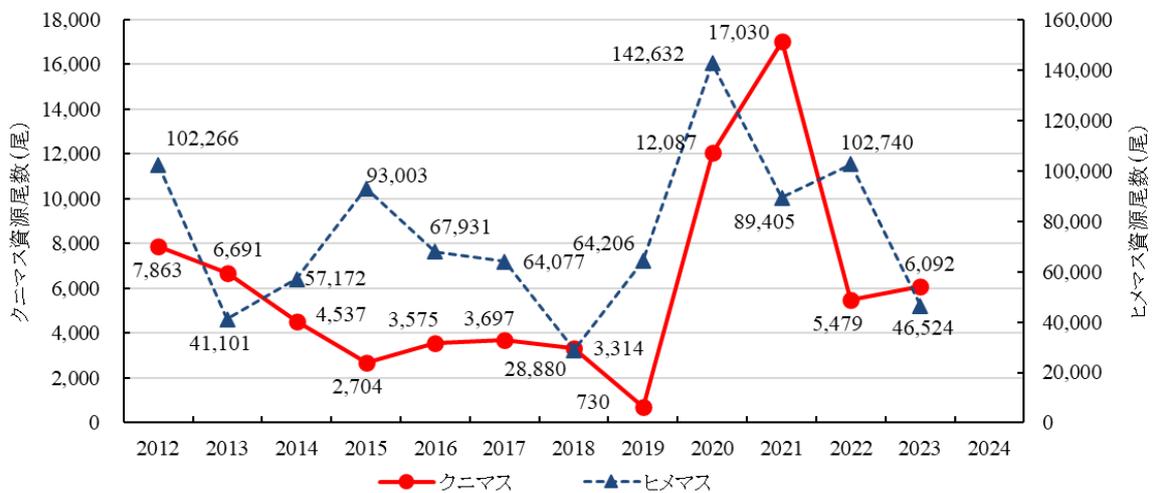


図1 西湖におけるクニマス及びヒメマスの推定資源尾数の変動（1歳以上、寿命6歳とした場合）

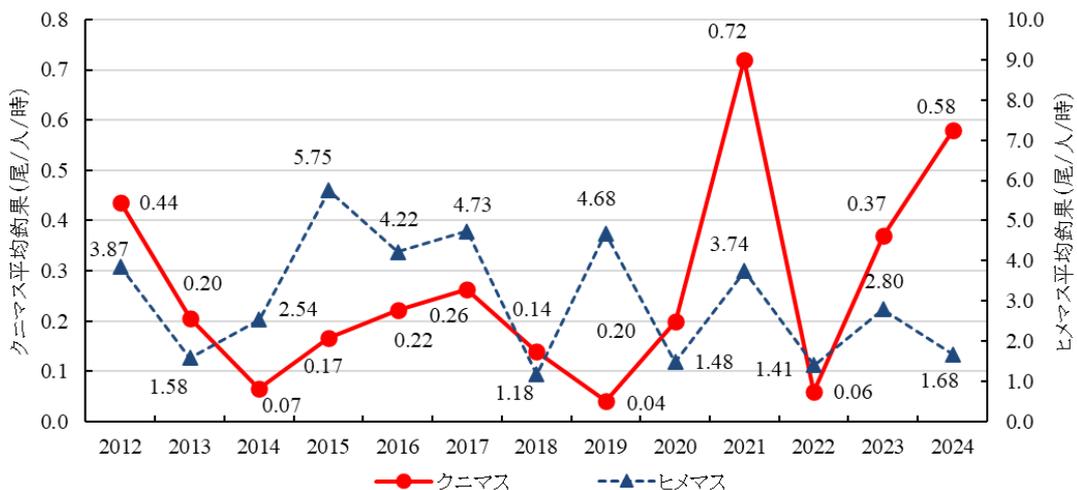


図2 試験採集時のクニマス及びヒメマスのCPUE（1人1時間当たりの平均釣果）